

待得て今ぞ時にあふふ、関路をさして急がん、むかしむかし往昔の其様に、しばしば似たる柴刈も、関屋守る身の片手業、柴を束ねてかいやり捨て、五尺いよこの手拭、五尺手拭中そめたしよんがへ
樵夫の歌も世を厭ふ、身につまされて惚ばしく、忘るる心に取敢ず、手馴れし琴を調へける、恨めしや我縁
ハテしほらしい音色ぢやな

駈る山路の関扉に、さしも妙なる爪音を、間に付ても身の上を、思ひ出せば鐘の帷帳、玉の台に人となり、翡翠の簪飾妍やかに、ある人は初花の

雨に綻ぶ化粧とは、女子をのぼす懸言詞、

今は夫には引替て、草の衣や袖せばき、姿を隠す蓑笠や

杖を力にたどとと関扉近く歩み寄る
宗貞盛を鎮め給ひ、雪降れば冬籠りせる草も木も、春に知られぬ花ぞ咲ける、何と関兵衛どうも言れぬ景色ではないか

成程左様で御座ります、此雪を肴に一つたべたらよう御座りませう、と話の中に小町姫、関の外面に立休らひ、申しちと御案内申しませう
あれ関扉に誰やら案内があるぞや

何案内とは何者ぢやと関兵衛が、関扉開いて

アア貴様は女ぢやな、此夕暮に供を連す只一人、此関へは何故来たのぢや

アイ私や三开寺へ参詣の者、関を通して下さんせ

成程通りたくば通してもやらうが手形があるか、其様なものは御座んせぬはいなア

手形がなくば通す事はならんならん

コレ其様に言ずとも、此大雪で難難義であらう、了簡して通してやりやいのう

さう仰有れば通してもやりますが、これ女中そんなら俺が尋ねる事があるが、夫を一々答へるか

成程私が覚えて居ることなら、何なりと答へませうわいなア

先づ第一合点がいかぬ

そりやマア何がへ

サア其訳は

一体きさまの風俗は、花にも勝る風姿

桂の粉黛青うして、又とあるまい

お姿を、お公卿さん方お屋敷さん、多くの中で見初たら、只は通さぬ筈なれど、其処を其儘捨置くは

生野暮渾鈍情なし苦なしを見るやうに、悪洒落いふたり大通仕打もあるまいが、何ういふ理屈か気が知れぬきがしれぬ

いやとよ我は恋衣、早脱捨て烏羽玉の、墨も袂の垂乳の、後の世願ふ菩提心、褐食の身にてさふらふぞや

ホウ言葉は殊勝に聞ゆれど、菩提の道に入りながら、何故黒髪を剃ぬのぢや

姿は世をも厭はばこそ、心で厭ふて居るわいな

シテ煩惱とは

菩提なり

提婆が悪も

観音の慈悲

又樂得が愚痴も文殊の智慧

智慧も容貌も取なりも

類ひなき身を百歳の、姥になるまで独寐は、惜い事では

ないかいな、お目にかかるも初深雪、凌ぐ小蔭もいとしやと、関の扉を押開き

こちへ

こちへと通しける

小町は見るより、マアお前は宗貞様、お懐かしやと取付いて、暫し涙にくれ居たる

是はマア思ひもよらぬ、此処へはどうして御座つたぞ

さればいなア、いつぞや布留の御寺にて、お別れ申した其後、王子様の横恋慕、是非に入内とある故に、館を出て此様に、身を忍んで居りますはいわ

夫は難き難難をさつたやれたであらうのう、某とても同じ身の上、コレ此所は先帝の御陵故、移し置きたる御愛樹のあの桜非生のものとは言ながら、崩御を悲しむ余りにや、薄墨色に咲たるを、

そなたの歌の徳によつて、盛りの色を増たれば、小町桜と言ふ、其名に愛でて少得も、一本の元に侘住居、思へば果敢ない縁ぢやな

始終を聞いて関守は、そんならあなたは小町様で御座りましたか、コレハコレハ少将様にも、嘸お喜びで御座りませう、是からは打寛ろぎで、其馴初めの恋話、お聞かせなされて下さりませぬか

イヤ此身になつて、今更語るも面伏せ

左は言迷ひの雲霧を、懺悔に晴すも悟りの道

そんなら恋の世語りを

早う聞きたい所望ぢやしようぢや

其初恋は去年の秋、大内山の月の宴、其折からに垣間見て、思ひに堪かね一筆と、書初めしより旦暮の

文玉章の数々は、何と覚えがあらうがの

其水釜のこまごまと偽りならぬ真実を、聞嬉しさも押包み、恋焦れても母さんに、一旦誓ひを立し身の、色に心は引れじと、思ひ返していなせをも、言ぬは言に真鯨坊の亡

小町とは言し恋草に、百夜通ふて誠を見せて、忍び俵の桶に行く、やつと姿の夜の道、いつか思ひは山城の、小幡の里に馬はあれども

さつても笑ぢや真実ぢや、一里あまりわくせきと、そんなら駕籠にも乗ずにか

君を思へば徒跣足

月にも行き

関にも行き

さて雨の夜に行く思ひ蟋蟀は我恋を思切れとの辻占も祝ひ直して

行く夜の数も九十九夜、今は、夜ぞ嬉しやと、待日になれば先帝の、崩御と間に身の上の

恋も無常と立かはる、君の菩提を棄はんと、位を辞していそのかみ、布留の御寺に終夜、御経読誦の折も折

私も其時母上の、後世折る志心、一夜籠りに思はずも、お顔を見るよりぞつとして身にこたへ、後生菩提も何処へやら、捨て二人が桶舟のいなにはあらぬ嬉しさに、立し誓ひは破られずと、つひ其儘のうき

別れ、思へば果敢なき縁ぞと、かこつ涙の流れては、関の清水や勝らん

関守側から、悲しいは是道理おだうり、何も彼も是からは、此関兵衛が館込んで居りまする

そんならお前に頼むぞへ

サアそれで定まつたと言ものだ、媒人は此関兵衛、四海波静かにでもあるまい、ハテどうしたものであらうなア、アア夫それ此関守には毎年七夕祭が、其祭になぞらへて、あなたは牽牛お前は織女

ヲヲそれぞれそれ秋と冬とは変れども、年に一夜の天の川

とわたる星になぞらへて、七夕祭にかからうか

実に織姫の簪の袖、秋の錦をおり機の中、中に繰の字をあらはし、砧の上へえんれつの声、頻りに眠なき機の音、きりはたりてうてう、賤が手業やことわざの、内に関兵衛懐中より、落せし割符を小町姫

手早くとれば

やそれは

それぞれそれぞれそこでせい

恋ぢやあるもの渡らでおこか、渡らば爾して斯してと、目機隙間を何白濁の、櫓を渡るか船にしよか、櫓と船とは恋の仲立ほんにへ

中々に初めより馴れずば物も思はじ、わすれは草の台にあれど、忍ぶは人の面影おもかけ、たまに逢瀬の七夕もせめて一夜あるものを、一期添れぬうき恋は、つれない此身ばかりにて、流涕こがれ泣給ふ
アアこれこれコリやどうで御座ります、其お歎きを見まい為、今宵しつぱり露霜に、色づく紅葉の橋渡し、所詮媒人は宵の程、われ等は奥で酒の酺、長居はおそれと走り行く